

Title	ツキヂデスの史學に就いて
Sub Title	
Author	原, 隨園(Hara, Zuien)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.1 (1925. 2) ,p.9- 42
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250200-0009

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ツキヂデスの史學に就いて

一、ツキヂデスの歴史觀

二、從來の歴史記述に對する彼の批評

三、彼の批判的態度

1、傳說の取扱ひ方

2、噂に就いて

3、史料の蒐集と批判

4、紀年法について

5、歴史事件の合理的解釋

四、歴史の動因

1、人間の性格

2、環境

3、運命

五、批評

ツキヂデスの史學に就いて（原）

(九)

一、ツキヂデスの歴史觀

「自分は、一時の賞讃を充ち得んがための論文として、是を書いたのでは無い。重代の寶として書いたのである」(註二)

といふ盛なる抱負から生れたものが、ツキヂデスのペロポンネソス戦役史である。アリストテレスはその政治學の研究には、歴史的方法をとつたが、その資料を提供したものは、一つには、明かに此のペロポンネリス戦役史であつた。(註二)又ギリシャ、ローマの多くの雄辨家は、ツキヂデスの跡に追随しようと企てたものであるが、それ程に辯舌の典據となつたものも此のペロポンネソス戦役史であつた。

(註三)彼の歴史は、種々の意味に於て古典的であり、従つて又各方面から考察さるべきである。然し始めて科學的に取扱はれたる歴史として見る時、彼が歴史といふものを果してどう解釋して居たか、又彼の歴史編述の態度はどうであつたか、といふ事は、一つの興味ある問題である。吾々が彼の著書の第一巻の二〇乃至二三節を翻くならば、此の問題の解答は、大體その中に盡されて居るといふて宜しい。が今少しく靜に、例へば彼は歴史を何と解釋したか、又彼の批判的態度はどうであつたか、或は彼は歴史の動因を何と考へたか、といふ事について、大歴史家ツキヂデスの歴史の種々の姿を眺めて見ようと思ふ。

彼の謂ふ所の歴史とは、それは歴史事件そのものではなく、記述されたる歴史を指すのであるが、それは歴史事件に關する正確なる知識を指すのであつた。而してかくの如く正確に歴史事件を記述する目的は、之を後世に傳へて以て後人の参考たらしめんとするものであつた。此の歴史記述に伴ふ實用的意味が、歴史の最初から存在するものであるか否かは、歴史の發生的考察から闡明さるべきであるが、少くも、ツキヂデス以後に於いては、是が歴史研究の主要なる目的と考へらるゝに到つたのである。

彼は曰く、

「過去に關する正確なる知識を求めて、未來の解釋に資せんとする所の研究者によつて、有益なりと認めらるゝならば、自分は満足しよう」（註四）

と。それがために彼は努めて、「事件の正確なる眞相を知らんがために、その注意を向けた」のであつた。（註五）

彼に據れば、歴史は過去の事件に關する正確なる知識である。歴史事件は、唯それが眞實であるの故に探求されるのである。歴史の語源 *Historia* が、眞實の探求を根本義とするは、此の場合特に興味深く眺めらるゝのである。ツキヂデスは又歴史事件を如實に記述した。敢て之等に就いて、何等道徳的宗教的な評價を試んとしたのではない。唯常に、事件の忠實なる記載者たり、正確なる記述をなさんと期したのである。即ちヘロドトスの企てた歴史のように、「過去の光榮を將來に傳へよう」とするものでは

なく、従つて、時によつては事實を傳へんがために人の興味を失ふ事を恐れはしない。否寧ろ、歴史の興味は、事件の眞實といふ點にかゝつて居るのである。

然し乍らツキヂデスは、歴史事件を單に忠實に記述するといふ事で、凡べてが盡されたと信ずるものではない。尙ほ別に一つの目的をもつて居た。それは然し、彼に於てのみ特に然りといふのではない。凡そギリシャ人にとっては、歴史は事實の單なる連鎖であり、事變の偶然的連續であるとは考へえられなかつた。個々の事件は、必ず、より大なる關聯に於て考察されねばならなかつた。一聯の歴史事實の中に、如何なる意義が包含されて居るか。その秘奧を探る事が歴史家の仕事に委ねられた。(註六) それはヘロドトスに於ても、ポリビオスに於ても見らるゝ所である。ツキヂデスはその歴史に於て——ペロポンネソス戰役の中に、又アテネの沒落の中に——衆愚の政治が國家を危機に誘導するを見た。彼は此の點に於て、一個の歴史哲學者であつたのである。かくの如く歴史の中に或る意味を探る事は彼の一つの目的であり、歴史の實際を記述し、それを通じて滔々たる世の風潮を警めんとした精神は、明かに看取する事が出来る。彼にとつては、歴史は實際一つの經世の學であつた。歴史をして、將來の事件に對する典據たらしめようといふ、彼の功利的實用的目的は、此の意味からも伴つて來るのである。アテネに惡疫が流行し、ペリクレスもそのために卒去したのであるが、その時彼はその病狀について詳しく述べて記録した。そして曰ふ。

「若し再び此の病氣が起つた際には、その道の研究者によつて、容易にそれが認められるようになると。たゞその兆向を述べ、その性質を記しあくのである」

と。(註七) 彼にとつては、歴史は、大にしては經國濟民に就いての資料を提供し、小にしては日常生活の指針とも考へられたのである。

將來の参考のためにといふ功利的目的を以て、彼が歴史を書いたものだとすれば、それは同一の歴史事件が將來重ねて起り得る事を豫想した上での事であるように見える。果して彼は、歴史事件の回歸、即ち同一の歴史事件が繰りかへさるゝ事を信じたであろうか。凡そ歴史における發展の概念は、歴史の目的及び價値の概念と共に、歴史哲學の一つの大問題である。(註八) 吾々人類の歴史が墮落に終るか、完成に導かるゝか、乃至墮落と完成との間を輪廻するか、それは歴史家にとつては一つの大きな謎である。ツキヂデスは、

「過去の事件は繰り返されないまでも、人間生活の進行の中に於ては、必ず類似したものが起るに相違ない」(註九)

といふて居る。歴史事件は回歸しないまでも類似する。之が彼の歴史事件に就いての基本的な精神であつた。然し歴史の進行に就いての見解は、歴史の本質の解剖から立論されたのではなく、猶ほ甚だ素朴であつた。彼の思想は人間の性情についての信念から出發する。人間の性質の變らない限り、その人間

が動作者である所の歴史事件に大差はない。過去に發生した事件は將來にも起り得る。縱ひ個々の事件に就いては、それ／＼獨特の差違があるとしても、人間の歴史には、全く異常な事といふは起らないといふのである。(註一〇) 個々の歴史事件の特異性、一回性は認めて居る。然しそれは必ずしも歴史が底止する所なく變動し行くといふのではない。歴史事件は本質に於て變りはない。唯同じような性質のものが、種々の形態をとつて動き行くに過ぎぬと考へたのである。而してそれが一定の窮極の目的に向つて進むか否かは問はない。唯繰り返されないが類似した事件が起るといふのである。彼の歴史觀は素朴である。とは言へ彼の歴史は、飽くまで人間の歴史である。此の世界を神の道具として解釋するような、歴史事件の中に神の力の干渉を認めるような見解からは遠ざかつて居た。此の點は從來の史學と異なり人間的科學的であると書いて好い。

註 一 Thucydides (R. Crawley譯) I. 22.

註 二 Wentzel譯. Aristoteles, Die Verfassung von Athen. Einleitung S. 9.

註 三 Cicero, (Yonge譯). On the Orator. IX.

註 四 Thucydides, I. 22.

註 五 Thucydides, V. 26.

註 六 Butcher, On the originality of greece. P. III.

註 七 Thucydides, II. 48.

註 八、Croce, Zur Theorie und Geschichte der Historiographie. S. 71.

註 九、Thucydides, I. 22.

註 10、Ibid. III. 82.

II、從來の歴史記述に對する彼の批評

シキヂデスの立場は事件の正確なる記述をなすに在る。従つて、必然的に、事件の眞偽を明白にし、誤りを匡さねばならない。彼の態度は斯に於てか、自ら批評的になつて行く。

シキヂデス以前の歴史、それは紀元前六世紀、恐らくは五世紀の半頃から漸く純歴史風になつたといふのである。純歴史風になつたといふ事は、叙事詩から離れて、事實を事實として物語らんとする傾向を意味する。ヘカタイオスは言ふ。

「自分が斯に書き記さんとするものは、自ら事實と考へた所の記述である。ギリシャ人の説話といふものは、數多くあるけれども、自分の見解では、皆一笑に附すべしものであるから」

と。(註1)

然しへロドトスは、此のヘカタイオスを散文作家 Logopoib と名けて歴史家とは見做さなかつたのである。(註11) それ程だから、ヘカタイオスの實際の業績は批判的ではなかつたらしい。けれども彼に

シキヂデスの史學に就いて (原)

於て、後世歴史と名けらるゝ一種の散文と、説話との區別が、事件の眞偽如何によつて定められたといふ事は確であり興味深い事實である。既にヘカタイオスに於て批判的傾向、懷疑的態度の現はれて來たといふ事を見遁す事は出來ない。叙事詩から區別されたる散文の歴史的傾向が、事件の眞偽如何といふ點から出發して居るといふ事は、歴史の本質と對照して注目しなければならない。

然し乍ら此のヘカタイオスにしろ、或は又ツキヂデスが散文作家 *Logographers* と名けて居るヘラニコスにしろ(註三)その批判はまだ十分嚴密ではなかつた。是等の人々は確に詩人ではない。だから歴史家と呼ぶべきものゝ、然し何れも歴史的事實の他、地誌的な材料を、多少編纂したものに過ぎずして、而もその材料に就いては、精査批判を加へなかつたものらしい。それ故にこそいづれも歴史家の名を以て呼ばれなかつたのである。

とはいへ歴史の父といふヘロドトスさへも事實の吟味、批判は極めて素朴であつて、科學的とは言ひ難いのである。彼はツキヂデスと殆んど同時代の人であつたにも關らず、恐らく學問の中心であつたアテネの文化圏から遠ざかつて居たためであろうと思はれるが、ツキヂデスの科學的批判的なのに比すれば遙に徑庭があり隔世の感さへ催される。即ちヘロドトスの記述は、「過去の光榮を將來に傳へんとするもので」あつて(註四)ツキヂデスの所謂「一時の賞讃を博せんとするもの」に過ぎなかつた。縱ひ彼の時代がギリシャ史中の最も懷疑的な時代であつたからだとはいへ(註五)ツキヂデス自身は實際極めて懷

疑的であつた是等在來の無批判な、依然として興味中心的な態度を以てしては、到底、正確なる事實を把持する事は出來ぬと考へたのである。叙事詩から區別されたる歴史的傾向は、尙ほ一層の事實の批判を俟つて、始めて最後の目的地に到達し得るのである。

さて正確なる事實の記述は、何よりも先づ誇張を排斥する。詩人といへば直ちに誇張といふ事が聯想された。誇張は所謂詩人の態度であつて、科學者の安住すべき立場ではない。科學的歴史家ツキヂデスは、第二のヘロドトスとなる事も、第三のホーマーとなる事も出來なかつた。「詩人が恣に使用し得ると感する所の誇張」(註六)「詩人が自己の手錬の誇張を示す所の、詩人の詩にあつて心を迷はされてはならぬ」(註七)とは、ツキヂデスが讀者が戒めた言葉である。

詩人が誇張するは詩的感想の昂揚である。感興を深からしむるためには、歴史にとつて缺くべからざる眞實性をさへも擲つた。それがツキヂデス以前の歴史家の態度であつた。正確を目標とする彼は、所謂ロゴグラフオスと呼んだ人達の、興味中心的な無批判な態度に従ふ事は出來なかつた。彼は「眞實を犠牲にして、興味を惹くような、ロゴグラフオスの文章によつて惑はされてはならぬ」と戒めて居る。(註八)眞相を物語つて興趣あらしむる事、それは固より彼の望む所であつた。然しけれども、一片の感興の故に、眞實を犠牲にする事は、彼には遂になしえなかつたのである。彼は曰ふ。

「自分の歴史に、物語りの缺けて居る事が、幾分の興味を殺がん事を恐れる」。(註九)

と。それにも關らず、事件の正確と眞實との前には、讀者の感興は犠牲にした。それ故に興味深き逸話を物語る事を主とせず、或は滅多に餘談に亘る事をしない。又彼以前の歴史家の如く、地誌的記述を専らとする事もない。若しそれ等の記載に亘る事ありとすれば、それは、目的とせる戰役史に關係ある限り、必要なる限りに於てであつた。此の點は一方に於て彼の歴史をして、純粹な戰役史として統一ある叙述を可能ならしめた所以であり、後世の歴史家をして推稱せしめた所以である。(註10)

さて、かくの如く、正確と眞實とを第一義におしたてたとすれば、彼はそれを何によつて獲得しようとしたか。それはいふまでもなく、一には正確な史料を蒐集する事により、二にはその批判によらねばならなかつた。彼はヘカタイオスのみに對しての批難ではなかつた。寧ろ之はツキヂデスが在來の凡ての歴史家の叙述と態度とについて、非議すべからむの多しとした、就中客觀的史料の確實ならぬ事についての、不満の一端であつたのだ。斯に彼の批判的立場が生ずる。

註 1・Bury, Ancient Greek Historians. P. 13.

註 11・Herodotus, Rawlinson譯. II. 143; V. 125; VI, 137.

註 12・Thucydides, I. 97.

註 13・Herodotus, I. の序論。

註 14・J. P. Mahaffy, A history of classical greek literature, Vol. II. Part. I. PP. 21.

註 八、Thucydides, I. 10.

註七、Ibid. I. 21.

註 九、Ibid. I. 22.

註 10、Wachsmuth, Einleitung in das Studium der alten Geschichte. S. 524及註1.-Burg, op. cit. 87. ff.

註 11、Thucydides, I. 97.

III、彼の批判的態度

1、傳説の取扱ひ方

在來の歴史が、或は誇張に流れて事實の正確を失つたり、或は材料の考證に於て缺くる所ありとしたるツキヂデスは、然らば如何にして自分の歴史を取扱つたのであるか。

彼は第一巻の始めにギリシャの古代史を考究して居る。然しへの國に於ても古代史には材料が乏しい。客觀的の史料を集めて、之に基いて批判的研究を試んとするも、史料の缺乏は如何ともする事が出来ない。此の史料に乏しい古代史の研究に於て、吾々は彼獨特の天才の閃光を見るのである。古代史研究の第一歩は、傳説の批判に始まつた。

「在來の歴史の取扱へる題材は、如何にも古くして到底典據をあげて考證しえざる範圍に入り、往々傳説の領域に入つて居る」。(註1)

と言つた如くギリシャの古代史については、偶々古傳説が存するけれども、從來の所傳は、即座に信すべきでないといふのである。何故に傳説は、その儘に事實として領解しえないのであるか。

時間の経過によつて、事件の真相が次第に曖昧の中に誘はれるといふ事は、既にヘロドトスも注目した所であるが、(註二)此の點はツキヂデスが特に意を用ひた所であつた。(註三)即ち彼は、古い傳説の持つ内容が、時の経過のために、次第に事實の真相から遠ざかり、殊に詩人の誇張修飾によつて、傳説の正確さが、彌々稀薄になつて居る事を知つて居た。されば彼は是等の傳説を史料として取扱ふについては、極力、信じ得べき他の證據に基いて考證しようと努めて居る。例へば、ヒッピヤスがピシストラトスの長子であり、潛主 Tyrant になつた男である事、従つてヒバルコスが潛主になつたのではないといふ事を考證し、通俗に流布して居る傳説の誤れるのを訂正した。而して此の考證は餘程彼の得意のものであつたらしい。(註四) 彼が、傳説の確實性に深い注意を拂ひ、吟味を行つた事が知られる。

かくの如く、傳説の正確さについて、信賴の薄い彼は、古代史の研究には、勢ひ、種々の方法を他に求めねばならなかつた。例へば言語學的方法である。ホーマー以前にはヘレネスは統一ある民族でなかつた事をホーマーの詩によつて論證したのもその一例である。(註五) ツキヂデスは詩人には誇張が多いとして斥けるのであるから、ホーマーの傳説の内容は勿論そのまま使用しないけれども、その文章の言語學的考察から推定して居るのである。

或は又ツキヂデスは、既に土俗學的考古學的方法をとつて居た。即ち當時の未開人の風習から古代の狀態を類推するといふような方法をも用ひた。例へば、古は海賊を以て男性的な行動と考へ、恐らく惡事を行ふとは考へなかつたろうといふ事を、當時の習慣から證明した如き（註六）又カリヤ人の埋葬法とデロス島における埋葬の狀態とを比較してカリヤ人がデロスに移住せる事を考證せる如き（註七）或は、アテネの舊中心は、當時の城塞と呼ばるゝ部分であつた事の考證の如きそれである。（註八）尤もシチリヤの古代に關する記事（註九）は、所謂ロゴボイオイの一人たるアンチファオンの記事によつたものと稱されて居り、特別の研究をしなかつたように思はれる、（註一〇）然し兎に角、彼の古代史研究法は、現代に於ても行はるゝ方法である。（註一一）かくて史料の最も乏しい且つ最も曖昧な古代史について考究を遂げ而も相當信頼し得る限りの結論に到達した事に自負して居るのである。（註一二）古代史の研究法だけを以てみると、彼は優に科學的史學の泰斗として推賞されるに充分である。

註 一、 Thucydides, I. 21.

註 二、 Herodotus, I. 23.

註 三、 Thucydides, I. 1.

註 四、 Ibid I. 20, VI. 54-55. 但しアリストテレスの「アテネの憲法」一八節には傳説に従ひ、ツキヂデスとは反對の見解を示して居る。

註 五、 Thucydides, I. 3.

註 六、*Ibid*, I. 5.

註 ヤ、*Ibid*, I. 8.

註 八、*Ibid*, II. 15.

註 九、*Ibid*, VI. 2-5.

註 10、Mahaffy, op. cit. P. 129.
註 11、Buy, op. cit. P. 103. 註。

註 11、Comperz, Greek Thinkers, I. P. 506.

註 11、Thucydides, I. 21.

2、噂について

ツキヂデスは、單に古い時代の傳説ばかりに注意をしたのではない。當時の通説とか、乃至噂といふものについても相當の批判を怠つては居ない。(註1)

噂は、之を傳説に比較すれば、時間の経過による曖昧さは少い。然し一方に於て、現代の生々しい事件は、關係者に深い印象を與へるのみならず、又當局者の利害には直接關係をもつのである。それ故に動もすれば噂は流傳を重ねる毎に誇張され易い傾がある。殊に人類一般の性情として、初めて耳に入つた事件の方が印象が深ひから、最初傳聞した噂を以て、後に聞いた噂よりもより眞實だと臆斷する傾向がある。事實の真相を明かにするについて、此の點が災をなすので、真相探究の困難は傳説と異なる

いといつてよい。従つて、縦ひ事の兩端を叩いて真相を把握せんとするも、既に先入主となつた偏見に據り、遂には事件の真相を十分に検査しない事が多い。かくの如きは、何れも當代の生きた噂を史料とするに際して陥り易き通弊だと指摘して居る。(註一)

かかる綿密なる用意を以て、又人々が動もすれば陥らんとする心的傾向について周到なる警戒を保つゝ彼は研究の歩武を進めたのである。然らば彼が目的とせるペロポンネソス戰役史の研究には、如何なる態度を以て行つたか。

註一 Thucydides, I. 21.

3、史料の蒐集と批判と

ツキヂデスの根本的態度が事件の正確を期するにあつたがため、史料の吟味が必然重要とならざるを得ない。ヘロドトスに於てさへ、自ら各地を踏査し、その地の古老に就いて所傳を求めるといふ傾向が起つて居る。ヘロドトスよりも一層批評的なツキヂデスは、固より慎重な態度をとつたのである。即ち史料の蒐集に於て及び史料の考證に於いて。

彼が第一に正確な史料の蒐集に全力を注いた事は言ふまでもない。公文書などは盛に引用した形跡がある。但し公文書の引用が、言葉通りであつたか否かといふ事は、多少問題であつて、大體はツキヂデ

ス自身の文章となつて記載されて居るらしい。例へば、第五卷の四七節にアテネとアルゴラとの同盟條約が記されて居る。偶々發見されたその條約の原文によつて、彼が原文をそのまま採録せず、文章を改訂して居る事が明かにされた。(註一) 然し文言は修正したとしても、内容は無論變つては居ない。のみならず條約の中には、ドリヤ人の方言で書かれたものもあつて、條約の本文通りであろうと考へらるゝ點もあるといふから(註二)此の點は何れへとも決定はし難いと思ふ。唯公文書を直接史料として使用した事は疑ふ餘地がない。

中にも五卷の七七節七九節に見ゆる所の、ラケダイモンとアルゴスとの間に結ばれた四一八年の平和條約と同盟條約とは、恐らくは彼がスバルタか或はアルゴスに於て手に入れたであろうと稱せられ、東西に馳驅して史料の蒐集に努めた事が覗はれる。又八卷の一八、三七、五八各節に見ゆる所の、紀元前四一二年にスバルタとペルシャとの間に結ばれた條約は、アテネに對抗せんための密約であつて、當事者は雙方共に發表を差控える性質のものである。殊にそれは本文通りと稱へられるのであつて、如何に蒐集に苦心したかといふ事も、容易に首肯される所である。或は之はアルキビヤノデスから手に入れたのかとも知れないといふ説もある(註三)が、何れにしても正確なる公文書を苦心して蒐集した事を認めなければならない。

更に、彼は史實の正確を期して居るだけに、蒐集した所の史料の考證には、細心な手順を踏んで居る。

それは全く史學研究の方法を順序正しく踏んで居るといつてよい。

彼は第一に、自分自らがペロポンネソス戰役史を書く資格のある事を述べて居る。即ち先づ自ら戰に參加し一軍の指揮をさへ擔當して居た事、次に味方の土地に親しく通じて居るばかりでなく、國を追はれてからは敵地にすら渡つて直接見聞する所があつた事、従つて事件の真相を探究するについても、至極公平であつて、苟くも敵の事情に疎いとか、或は偏頗な考に墮したといふ批難は受くべきでない事、なごを明示して居る。殊に自分が、事件を理解し得る能力を具へ相當な年齢に達して居た事を、先づ讀者に斷つて居るに至つては、縱ひ時代の風潮が論理主義に傾いて居たとはいへ、ツキヂデスが執筆に際して、如何に細心な注意を拂つたかといふ事を思はせるではないか。(註四)

第二に注目されるのは、彼の書物の五分一乃至四分一をも占める所の四十一(註五)の演説である。固より是は彼が恣に架空のものを創作したり、或は捏造したものではない。それ等は或はツキヂデス自身が直接聞いたものもあり、又間接に他人から傳聞したのもある。史料としては比較的確實の程度の高いものである。然し今吾々は、史料としての此等の演説を彼が如何に取扱つたかに注意したい。

彼は元來人間の記憶が到底是等の演説を言葉とほりに再現する能力の無い事を知つて居た。(註六)記憶の不確實を慮つたについてはこういふ例がある。ニキヤスがシラクサから救援を求むるために本國ア

テネに向つて使節を派遣した。その時使者に書面を渡して居るが、何故口上でなく書面によつたかといふ動機を解剖して第一には使者が十分口上を述べえないかも知れぬといふ事、第二には、記憶の誤りのため、或は又群集を喜ばしめんがために、眞實を語らぬ事がありはすまいかといふ事、それをニキヤスが恐れたからであると言つて居る。(註七) かくの如き、人間の心的活動についての微細なる注意こそはツキヂデス自身の歴史記述の慎重なる態度に他ならない。

かく人間の記憶力を絶対に信じ得ぬとした結果として、是等の演説を、縱ひ自ら直接聽いたとしてもそれを言葉通りに表現しようと努める事によつて、反つて、人間心性の微力から生ずる所の、避け難き然し史實にとつては許され難き、過誤を犯す事を恐れた。於是彼は、危険なる再現の企を放棄し、寧ろ直ちにその演説の持つ内容に突き進んだ。そして演説されたる周囲の事情を洞察する事によつて、最もその場合に相應はしい言葉に翻譯して物語らせて居る。それ故に、言葉通りには信じ難しとするも、その演説のもつ内容については、之を事實と信じて好い。尤も彼が第三者をして第一人稱をとらしめた事に就いては批難もある。又實際彼の缺點とも目さるべきである。然し乍ら是は恐らくは、在來の記述法に則つて第一人稱をとらしめたものらしく、實に後世まで此の種の表現法は存續するのである。それ故に此の點は彼の重大なる缺點の一つではあろうけれども、吾々はむしろ從來無關心に閑却されて居た再現の危險といふ點に彼が鋭き批評眼を向け、言葉通りの再現を避けた事と、及びよく事情と境遇とを洞

察して眞相を彷彿しようとした態度を認むべきだと思ふ。

吾々は今ツキヂデスが人間の知識や記憶の限界を認めた事に言及したが、之と相並んで、彼がその史料の利用に對する深い注意に敬服しなければならない。

彼は極めて批判的懷疑的である。正確なる史實を語るために根本史料を探求し、自己の體験をも交へて居るが、その自己の體験をすら絶対に信頼し得なかつた程、それ程懷疑的批判的であつた。されば他の史料の存する時には、たとひ自己の體験と雖もそれのみを重しとする事なく、必ず之を對比して然る後取捨採擇したのである。要は嚴重なる批判の結果によつて定まつた。かくの如きは、人間の記憶の不完全と、人間の偏見とを信じて居たからである。それ故に、此の人間の弱點から生ずる史料の撞著に對しては、「多大の苦心を拂つて、正確妥當なる結論に導かんとした」(註八)と言つて居る。ヘロドトスは、各地の古老の言を直ちにとつて採録して居るが、ツキヂデスは、それを史料として使用するまでには、嚴重なる批判を先づ第一としたのであつた。

又ツキヂデスは、斷定を苟もする事はなかつた。軍隊の數は事機密に屬して不明であるとか、(註九)或は死傷者の數が市の人口に比して多いのは疑はしいとか、(註一〇)或は最少限度に於て幾許、(註一一)とかいふ風に、先づ批判し疑はしきを缺いて、然る後その餘を言ふといった、着實な行き方である。

彼の書物に於ては、考證の手順は一々示されて居ない。殆んど唯その結論のみが擧げてある。然しかくの如き細心なる彼の態度を觀察すれば、直接史料に接しない吾々も、彼の結論に向つては、多大の信頼をよこしむ誤はない幾かべつ。

註 1' Mahaffy, op. cit., P. 123. 及註 3.

Wachsmuth, op. cit., S. 244. 及註.

註 11' Conperz, op. cit., I. P. 513.

註 111' Bury, op. cit., p. 84.

註 四' Thucydides, V. 26.

註 五' Mahaffy, op. cit., P. 109.

註 六' Thucydides, I. 22.

註 七' Thucydides, VII. 8.

註 八' Ibid, I. 22.

註 九' Ibid, V. 68.

註 10' Ibid, III. 113.

註 11' Ibid, VII. 87.

ツキヂデスの細心なる注意は、紀年法にも現はれて居る。當時に於ては、まだギリシャ人の世界に、統一した所の紀年の標準はなかつたようである。オリンピヤドの如きは、甚だ不便でもあり且つ不完全な紀年の標準であるが、それさへも、ギリシャ史の標準的紀年法とされたのはチャマイオス以後の事と考へられて居る。(註二) 即ち紀元前四世紀の後半以後である。さればツキヂデスの頃には、地方地方によつて紀年の標準が異つて居た。或は主權者の統治年代、或は祭典の時日等を以てそれゝの地方の標準として居たものらしい。ツキヂデスと雖も亦、隨所にかかる紀年法を擧げて居る。

例へばスバルタではエフオーロス、アテネではアルコン、アルゴスでは司祭、ペルシャでは國王を標準とする。(註二) 或はオリンピヤ競技會(註三) アテネにおけるパンアラナイヤの大祭(註四) デイオニュソスの祭(註五)(又はアンテステリオン)(註六) ヒヤシンシヤ祭(註七) エラフエボリオン(註八) などの如く神祭を標準にする事もある。或はポチダイヤの戰をあげ(註九) 或はアルテミシウムの月(註一〇)などといふ句も見えて居る。

地方に起つた局部的な事件の記述には、かゝる紀年法でも不便は少ないかも知れない。然しペロポンネソス戰役といふようなギリシャ人全體に亘る歴史事件の記述には、是非とも統一ある紀年法を用ひなければならぬ。統治者を標準としては地方的な嫌があるのみならず、その治世には長短があり、治世の始めと終りとの間にも差がある。季節の如きは重ねて記述を煩はさねばならない。祭日と雖も亦地方

的なる恨もあり年によつては時日の變動を免れない。それ故にツキヂデスは、地方的な移動性の多い、是等の紀年法を避け、一年を夏と冬といふ二季に分つて記述を試みたのである。之は野外に出でて活躍する戰爭、特に海上における活動が冬期に休止される事を思へば、戰爭の叙述に當つても便宜が伴ふ譯である。

固より紀年法として之は正確な表現法ではない。その上春とか秋とかいふ他の季節を擧ぐる事さへ少く、殊に秋については、僅に一二を記載せるに過ぎない（註一）故に彼の紀年法は甚だ不精密であると言はねばならぬ。のみならず、夏冬といふ季節を以て一年となし、之を中心としてツキヂデスは事件を編年體に叙述した。餘りに編年體に拘泥したために、一聯であるべき事實が時々中途に於て截斷される不便があつた。之は屢々彼が批難するゝ點である。（註一）

然し乍ら幼稚なる地方的局部的な紀年法を用ひた時代に、正確を期せんがために、かくの如き新紀年法を採用したといふ事それ自身は、誠に史學史上の一進歩であつたと言はねばならない。彼の新しい紀年法の試みさへも、なほかくの如く幼稚であつたといふ事は、彼の缺點と言はんよりは、寧ろ時代の受くぐれ批難であろうと思ふ。

註 1. Bury, op. cit., P. 168.

註 11 Thucydides, II, 2; V. 19; V. 25; VIII. 58.

註 12 Ibid. Ibid. V. 47.

註 13 Thucydides, V, 20; 23.

註 14 Ibid, II. 15.

註 15 Ibid, V. 23.

註 16 Ibid, IV. 118; V. 19.

註 17 Ibid, II. 2.

註 18 Thucydides, V. 19.

註 19 Ibid. VII. 20; VIII. 188.

註 20 Wachsmuth, op. cit., S. 524.
註 21 Mahaffy, op. cit., P. 102.

5、歴史事件の合理的な解釋

既に説いたように、ツキヂデスの作品は、殆んど同時代の人といつてもよじロドトスのそれに比較すると、遙に科學的であつて、兩者を對照して見ると時代が餘程隔つて居るよう見える。その史料の取扱ひ方に於て、極めて嚴格慎重なる態度を執つた事の如き、或は神といふ超越的な力を借りて事件の説明を下した事の如き、非常に徑庭がある。恐らく之は個性の相違によるのである。けれども

先きに一言したように、ヘロドトスが小アジヤに居たのに反し、ツキヂデスが文化の中心たるアテネに居た事のため、アテネに行はれたる合理的批評的又人間的な思想の感化が少くなかつたがためと思はれる。

ツキヂデスが演説を盛んに引用して居るのは、事件の發展を説明的に記述しようといふ簡単な意味から常套的方法に従つたといふのではない。反つて合理的に事件の展開を叙せんがための手段と考へられる多くの場面に示さるゝ討論の如きは、是によつて意見の兩端を叩いて、大勢が合理的に進行するのを示さんとしたものと解釋される。是等は當時アテネに流行して居たプロタゴラス等のソフィストから(註一)或はゴルギヤス、アンヂフォンの如き修辭家から(註二)受けた影響が少くはなかつたであろうと思はるゝが、兎に角合理的論理的な點は彼の歴史の著しき特色の一つである。

討論を通じて示されたる人々の性質、心的傾向の叙述又は事態についての表現は、在來の、劇的な歴史記述の方法の長所に鑑みたる、そして恐らくは彼の苦心に出でたる所であろう。(註三) 是によつて讀者は、その光景を彷彿する事さへ出来るのであつて、慙ひに、原因を經濟的政治的なごとく分解的に説明さるゝよりは、反つて、事件の全體としての推移がよく劇的に開陳され、一層明瞭に事件が理解されるのである。確に在來の手法を活用して居ると言つて宜しい。

彼の態度はあくまでも合理的であり、論理的であり、而して又自然主義的であつた。彼は敬虔な男で

あつたけれども（註四）超自然的な神の力が歴史に干渉することは思はなかつた。例へば託宣を排斥するが如れそれである（註五）偶々神の力の存在を認むるとしても、それをへ合理的に正義に組すると考ふる程、それ程ツキヂデスに於ては合理的解釋といふ者が重きをなして居た。

然し乍ら此の合理的自然主義的解釋といふ事のみが彼の特色ではない。彼の戦役史の中には猶ほ、心理的な歴史觀が著しく現はれて居る事を見逃す事は出來ない。ツキヂデスが如何に人間心理の解剖に重きをおこ、此の點に歴史の秘鑰を求めるに努めたかといふ事は、改めて考察されなければならない。

註 1. Gomperz, op. cit., I. P. 465.

註 1] Mahaffy, op. cit. II. Part. I. P. 98.

註 II. Mahaffy, cf. P. 108.

註 四. Mahaffy, op. cit. PP. 122.

註 五. Thucydides, II. 17.

四、歴史の動因

1. 人間の性格

人間の性質に變化なし以上、歴史事件も大差なしとする彼の見解（前出）は、彼が歴史の根本的動因を人間の性格においた事を物語るのである。ツキヂデスが人間の心理作用に注目した事は、彼の史料の取

扱ひにもその片鱗が示されて居るのであつて、吾々は既に注意した所である。彼の歴史解釋の中では、何よりも先づ心理解剖が鮮かであると言つてよい。

殊にツキデデスは群集心理に對する深い理解をもつて居り、革命が如何に人々の性格を傷けるかに就いても論述して居る。(註一) 或は人々が激怒して反省の暇もなく、直接行動にさへ猛進する事あるを認めて居る。(註二) その他利益に誘はれ恐怖に脅され本能(註三) 又個人的打算(註四) 復讐の情熱(註五) 或は黨派的反感(註六) 等が極めて明瞭に描寫され、それ等人の感情が、歴史進行の強い動因として示されて居る。時には表面の口實と、及びその裏面に潜む所の、醜い、然し本能的な自然的な動機を併せ挙げて、事件を促進する理由として居る。(註七) 人間性情の中に存在する所の、恐怖嫉妬憎惡といふような、本能的な感情を以て、人類の行動の強い動機だと考へて居る。

先きに述べたる如く、ツキデデスの見解によれば、歴史事件の進行は合理的であり、且つそれは今説きたる如く、人間の性情によつて大に支配されるといふのである。(註八) 而して性情を動機とするとは言へ、彼の方法に於ては集團としての民衆意識を先づ第一に描寫して居る。かの有名なるペリクレスの葬演説の中には、アテネ人の性格が巧みに躍動して居る。是は衆團の力の強かつた、民主的なりし時代相の一面であろう。

然し乍ら一方に於て、歴史の動くのは、唯民衆の自覺自信のみによるものとは考へない。偉大なる個

性を點出し來つて、例へば民衆指導者の性格を主とし、之に民衆が附隨して動くが如く解釋する場合もある。(註九) ペリクレスやニキヤスの如き民衆指導者の性格の描寫には、殊に意を注いで居り、時に是等の中心人物に對する批評をも加へられて居る。パウサニヤスの、近づれ難い、又激越なる心性が、その同盟市をアテネ側に傾かしめた主要なる理由と解釋したのは、個人の性格の中に歴史の動因を求めた一例である。(註一〇) 畢竟それ等の人々の性格が歴史事件を動かすと考へたるがためであつて、性格の解剖よりも進んで歴史事件の動機を解剖せんとの意味に他ならない。此の點から言へば、ツキヂデスは一面客觀的史料を尊重する所の歴史家と稱せらるゝにも關らず、他の一面に於ては、著しく主觀的なる傾向も持つて居たと言はねばならない。(註一一)

註 一 Thucydides, III. 82. etc.

註 二 Ibid. I. 11.

註 三 Ibid. I. 76. etc.

註 四 Ibid. V. 43.

註 五 Ibid. III. 82.

註 六 Thucydides, III. 84. etc.

註 七 Ibid. VII. 49. etc.

註 八 M. Ritter, Die Entwicklung der Geschichtswissenschaft. S. 24.

註九、cf. Wachsmuth, op. cit. S. 521.

註一〇、Thucydides, I. 130.

註一一、Wachsmuth. S. S. 522.

2、環境

ツキヂデスの見解によれば、歴史事件を規定し進行せしむる根源は人間の心理状態であり性格である。歴史事件の動因は心理である。此の人間の心性を更に規定し變動せしむるものが存在する。その第一が環境である。

彼が演説の表現に際して、その真相を傳ふるためにその周囲の形勢の理解を第一とした事は既に説いた所である。「友情や敵意は、いづこに於ても時と場合との問題である」とエウフエモスの口を通じて呼ばしめて居るのは（註一）事件を圍繞する雰囲氣といふものが、如何に事情を動かすの力ありと信じられたかを示すものと言ふてよい。歴史を動かす楔機たる人々の心は、かくの如く、突嗟の間に環境の支配を蒙る事ありと解釋して居るのである。或は又平穀無事な時に於ては、人々の心は極めて美しく戰鬪亂裡にあつては、如何に人の心が低下するかといふ事ものべて居る。（註二）境遇の變化が人心を左右する事を示したものといつてよい。

又スバルタ人とアテネ人の性格を比較した所によれば（註三）陸軍國と海軍國とに現はれたる國民性の相違、従つて又環境と性格との關係に、十分の注意が拂はれて居る事が理解される。即ちスバルタ人は遲鈍であり精力的でなく、之に對してアテネ人は敏捷であり企業的である。そしてかゝる國民性の相違は主として環境の支配に據るものであり、凡べての海國民は、何れもアテネ人の如く俊敏であり精力的であると考へて居る。即ち同じ様な境遇は、性格の上に同様な變化を及ぼすと信じて居るのである。

要之、ツキヂデスは、環境といふものが、歴史の動因と目される人間の性情に對して、或は持続的に或は一時的に、強い影響を及ぼすといふ事を認めたといつて好い。

さてツキヂデスは、かくの如く周圍の事情によつて人心が變化する事は免れぬと解釋するのであるが、それ等の外的な事情の中に於ては、政治組織と外交關係とが最も注意されたのである。第一卷第一五、一六節に、國民的發展を妨ぐる障害として、外國との衝突と及び國內におけるタイラントとを擧げて居るのは、一つの都合よき例證である。

元來紀元前五世紀の後半から四世紀へかけては、ギリシャ政治生活の上に於て最も興味の深い時代であつて、従つて此の時代に於ては、一般の注意が政治に向けられたのである。ツキヂデスに續く時代には、盛に政治論が出版されて居る（註四）彼も亦アテネの政治生活の變轉に強き魅力を感じ、「特に政治的

見地から政治的活動を考察闡明せん』(註五)と試みたのであつた。名は戦役史といふものの實は、ギリシャの政治状態を説明した政治史である。それ故に、歴史事件の解釋について、政治的方面から考究を進めたのは無理からぬ次第である。

彼の書物の中には、自由を愛するギリシャ人の熱情が到る所に見えて居る。アテネ方もスパルタ方もその主張する所に従へば、それく彼等の自由の擁護のため恢復のために戦つて居るように記述されて居る。即ち政治的自由への渴仰、それが人々を驅つて戦に赴かしめた理由であり口實であつた如く記されて居る。それ程政治的自由といふ事が、ギリシャ人の強い欲求であつたといふのである。或は又アテネ人がその强大を致した原因の一つは、アテネの民主的な政治組織にあつたのであつて、而してその政治生活における自由こそやがて日常生活における原動となつたとペリクレスは言つて居る。(註六) 即ちツキデデスの見解に従へば政治組織は、歴史の動因たる人間の性情に對する、強き規定の一つであるのだ。

又ペロポンネソス戦役は、ギリシャの代表的勢力の爭霸戦であり、ギリシャ諸市の勢力の分野が二派に別れての戦であつた。それ故にツキデデスが、外交關係の考究に力を注いだのは當然であつた。戦の誘因をエピダムノスの事件及ボチダイヤの事件においた事、(註七) 或はコリントがアテネに對しても

つ反感の由來を種々に解説した事、(註八) 或はスバルタとアテネとの抗争が根柢に於て、アテネの興隆に對するスバルタの驚愕であると道破した事、(註九) などは、それであつて、根柢に於てはいづれも心理的解釋に歸着し得るものであるが、それと同時に、對外關係が如何に國民生活に關與するものであるかといふ事に重點をおいて居るといふべしである。(註一〇)

要之、スキヂデスは、歴史を動かす楔機を人間の性情におくと同時に、その根本的動因を規定するものとして、或は政治組織或は對外關係等の如き環境をあげ、是等が相錯綜して歴史が産み出され行くと見做して居る。

註 一、Thucydides, VI. 85.

註 二、Ibid. III. 82.

註 三、Ibid. VIII. 96.

註 四、Buyy, op. cit. PP. 180-.

註 五、Ibid. P. 141.

註 六、Thucydides, II. 57.

註 七、Ibid. I. 24-65.

註 八、Ibid. I. 55, 103.

註九、Ibid. I. 23.

註一〇、Wachsmuth, op. cit. S. 520.

3、運命

合理的心理的な解釋を試したるツキヂデスが歴史の進行を解釋するに當つて、運命の力を如何に取扱つたかといふ事は、極めて興味ある問題であるが、それに就いては、拙稿「時、運命」(史學雜誌)の中に述べたから、今は省略する。

五、批評

以上解説する所によつて明かるる如く、ツキヂデスの歴史記述は、その態度の冷靜にして著しく批判的合理的なる點に於て、又その透徹せる解釋に於て、更にその用意の周到なる點に於て、全く近代的科學的であつた。若し彼の精神の存する所を心として考へて見るならば、近代の批判的科學的態度と少しも變らない。恐らく彼以上に出る事は、決して容易でないと言つて宜しかろう。(註一)

然し乍ら彼の記述と雖もなほ完全であるとは言へまい。例へばその考究の範圍について見るも、それには題材が多少局限されて居る事を考慮せねばなるまいが(註二)然し唯戰爭の進行にのみ重きを置いた

結果として、一般文化への省察が着しく不足して居る事を認めなければならない。經濟的社會的考察もその中に試みられ、就中政治的考察には力が用ひてはあるけれども、然しそれすら、戰爭の解説としての、いはゞ附帶的説明たるに留まり、その戰争との相互の關係、殊に戦の及ぼせる影響についての考究が甚だ乏しい恨みがある。

又同じ題材を取扱ふにしても、全ギリシャ民族の背景が少ない。ポリビオスとは時代も隔つて居るとはいへ彼のような世界的統一的な考察がツキヂデスには見られない。此の點も稍未だしく思はるゝ點である。

或はその表現に就いても、編年體の記述法を用ひたるがために、事件の記載が錯雜し甚しく統一を破つて居る。

その他演説に關しては、彼が第一人稱を用ひた點は恕すべしとするも、討論好きな彼は、演説を通じて事件を論理化し、稍々その埒を越ゆるものあるが如くである。

かくの如くツキヂデスをその批判的科學的なる方面から眺むれば、正にゴムベルツの所謂「近代人中の近代人」である。(註三) 然し、その未だしき點より論すれば、ショットウェルの所謂「原始的なるにもあらず、近代的なるにも非らず、正に古拙なり」と謂ふべきである。(註四)

註 1. Mahaffy, op. cit. P. 123.

原 隨 園

(一九二二年十一月一稿)

- 註 〔1〕 Wahrnund, op. cit. S. 25.
註 〔2〕 Comperz, op. cit. I. P. 503.
註 〔3〕 Shotwell, op. cit. PP. 174.